

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

(平成 26 年度第 1 回研究会)

日時：平成 26 年 7 月 20 日 (日曜日) 午後 2 時より 6 時

場所：AA 研マルチメディア会議室(304)

## 1. プロジェクト趣旨説明

近藤 信彰 (AA 研所員)

プロジェクトの趣旨説明が行われた。昨年度まで行われていた「近世イスラーム国家と多元的社会」がどちらかといえば、国家の統治と社会との関係を問うものであったのに対し、「近世イスラーム国家と周辺世界」では、より同時代の世界との関係を重視し、ヨーロッパや中央アジア、東南アジア、南アジアなど隣接する地域を含めた関係性のなかで捉えることが説明された。

## 2. 報告 1

木村 暁 (AA 研共同研究員, 筑波大学)

「近世中央アジアにおけるハン号の意義変容ーブハラ王権の事例から」

木村報告は、中央アジアにおいてチンギス・ハンの子孫にのみ用いられてきた「ハン」という称号が、18 世紀においてその意味内容を変えた事実に着目し、中央アジアにおける王権とその正統性の変容について論じたものであった。

中央アジアにおいては、モンゴル帝国以降、チンギス・ハンの男系子孫のみ君主たるべしという政治的伝統があった。ティムールは傀儡の「ハン」を立てて、自らは女婿を示すキュレゲンを名乗った。シャイバーン朝(1500-99)やアシュタルハーン朝(1599-1747)はこの伝統に則っている。しかし、1747 年からブハラを実質的に支配したマンギット朝はチンギス裔ではなかった。したがって、この王朝のムハンマド・ラヒームは、当初は伝統にしたがって「ハン」とは名乗らなかった。

しかし、ムハンマド・ラヒームは 1756 年に「ハン」として即位する。従来の研究は、これが可能であった理由を十分説明できなかった。木村氏は、ここには、イランのナーデル・シャーのブハラ支配(1740-47)の介在を見る。イランにおいては「ハン」位の意味は中央アジアより早く変化し、18 世紀においては君主ではなく、総督や貴顕が持つ称号であった。したがって、イラン側の史料は、ムハンマド・ラヒームを「ハン」という称号と持つことに、何のためらいもない。ナーデル・シャー支配を脱した後の 1756 年、ムハンマド・ラヒームはチンギス裔の妻を迎え、ティムールと同じ形を整えつつ、さらに自らハンと名乗ったのである。さらに、ムハンマド・ラヒームは『ハンの贈物』という年代記の執筆を命じ、

ナーデル・シャーが彼を「ハン」と呼び、マーワラーアンナフルの支配の全権を委ねたことを主張したのである。

しかし、印章、勅書、貨幣といった法領域と直接関わる文献類型においては、ハンの公証は差し控えられたと見られる。この意味で、依然、チンギス・ハンのヤサの伝統が残っていたと言いうる。ただ、19世紀に入ると隣国であるコーカンドやヒヴァに非チンギス裔のハンが出現し、ハンの意義変容プロセスは加速していったと考えられる。

(文責：近藤信彰)

### 3. 報告 2

Aftandil ERKINOV (ILCAA Visiting Professor, Tashkent State University of Oriental Studies)

“Negotiating Islam?: People and Governor-Generals in Turkestan, 1867-1917.”

エルキノフ氏の議論は、トルキスタン総督府統治下の中央アジアにおけるテュルク語化の進展を、総督府の宗教・文化政策との関連で捉える刺激的なものであった。ロシアのトルキスタン支配が始まると、トルキスタン総督府は住民のロシア化・キリスト教化を望んでいた。しかしながら、これは大多数のムスリム住民をかかえる中央アジアでは、不可能であった。そこで、総督府は、イスラームの制度を利用して、住民をそれまでの文化伝統から切り離す策を考えた。

当時は、もちろん、アラビア語がイスラームの基本言語であり、また、ペルシア語がイスラームの主要言語であった。たとえば、フトバ（説教）はアラビア語で読まれるのが伝統であり、そこには、時のムスリムの支配者の名前が詠み込まれた。ところが、1892年、時のロシア皇帝、アレキサンドル3世の名前でフトバが詠まれ、しかもそのフトバはテュルク語だったのである。さらに、このフトバは印刷され、各モスクの壁に貼られることとなった。テュルク語のフトバを通じて、ムスリム住民がロシア皇帝の支配を認めた瞬間であった。

もう一つトルキスタン総督府が利用したのは、説教師（マッダーフ）である。説教師はムスリム達の間を廻り、預言者物語などさまざまな宗教的な説話を語って、いわば民衆のイスラームを支える存在であった。トルキスタン総督府はこれを非常に警戒していた。そこで、総督府は、説教師達に、預言者ムハンマドについて語ることを禁じた。かわりに、中央アジアのムスリム聖者たち、たとえばアフマド・ヤサヴィーなどについて語るよう命じたのである。これによって、パン＝イスラミズムにつながるようなイスラームの普遍的要素は減少し、ローカルな地方固有の要素が増大することになった。

さらに、トルキスタン総督府は、20世紀初頭になると石版の印刷所を建設し、テュルク語による出版を奨励した。それまでのイスラームに関する書物は、簡便な入門書であっても、アラビア語やペルシア語で著されていた。特にインドで出版されたペルシア語による信仰の手引き書は、中央アジアに広く行き渡っていた。総督府による大規模な出版事業は、ペルシア語による宗教入門書を一掃する役割を果たし、中央アジアの人々の間に、テュルク

ク語が書き言葉として定着することに大きな貢献をなしたのである。

以上のように、トルキスタン総督府のイスラーム政策と言語政策は密接に関わっていた。それは、中央アジアをいかに他の地域のムスリムから切り離し、自らの統治に服させるかという課題に対応するためだったのである。

(文責：近藤信彰)